

沖縄戦に動員された朝鮮人に関する一考察 —特設水上勤務隊を中心に—

沖 本 富貴子*

A Study on the Drafted Koreans in the Battle of Okinawa: —Focusing on the Special Water Service Unit—

OKIMOTO Fukiko

要 旨

沖縄戦に朝鮮人がどのように連行され配置されたのか、所属した部隊と配置数から全体の輪郭をつかもうとした。部隊別に死亡者の数、死亡時期、死亡場所を見ることによって戦場での実態に近づこうとした。さらに朝鮮人部隊であった特設水上勤務隊について動員から沖縄の港湾作業につくまでを具体的に辿った。

要 約

竹内康人（2012年）によって沖縄戦に動員された朝鮮人軍人軍属が配置された部隊と、その人数が初めて明らかにされた。日本政府が韓国政府に渡した朝鮮人名簿をもとに分析を進め発表したものである。この研究をより沖縄に近づけて解釈し紹介した。その結果、特設水上勤務隊以外にも32軍防衛築城隊、歩兵隊、海軍の設営隊など65部隊以上にわたって少なくとも3,500人余が動員されていたことが分かった。部隊別に死亡者数と時期と場所を集計した結果、本島においては首里の攻防や南部に追い詰められて犠牲になったものが多かった。海軍においては小禄、豊見城で6月14日前後に命を落としている。

こうした研究によって「沖縄戦には『朝鮮人軍夫』が『1～2万人』動員され、『雑役』を担った」とする定説が検証され、実態に即して書き換えられていく契機になることを意図した。さらに「朝鮮人軍夫」という表現が妥当であるかについても検討を加えた。

朝鮮人部隊であった特設水上勤務隊について戦時資料や留守名簿、陣中日誌に照らし、編成から沖縄での港湾作業につくまでを詳細に見た。また港湾作業がどのようなものであったか、その実態について当時の陣中日誌及び住民の証言も交えて具体的に示した。本稿は地上戦が始まるまでのいわば序盤までを一区切りとしている。

キーワード：沖縄戦、朝鮮人、朝鮮人軍夫、留守名簿、特設水上勤務隊

* 沖縄大学地域研究所特別研究員

はじめに

沖縄戦に動員された朝鮮人は、大別すると軍人軍属として陸海軍に配属され沖縄に送りこまれてきた朝鮮人と、軍の下請け民間業者に連れて来られた朝鮮人の二通りの形があった。さらに厳密に言えば戦前から沖縄に居住していた朝鮮人もまた沖縄戦に巻き込まれたと言える。久米島の谷川さん一家惨殺事件¹はその最たるものである。軍の性奴隷として連れてこられた女性たちの存在もまた見逃すことはできない。

労務動員、いわゆる民間業者に雇われた朝鮮人については今のところ石垣島の海軍飛行場建設の事例が明らかになっている。大林組の下請け土建業者原田組が日本本土から朝鮮人労働者を連れて来ている。ここで働いていた朝鮮人の証言によると、鳥取の海軍飛行場建設で一緒だった朝鮮人労働者100人と共に石垣島にわたってきたが、現地で海軍軍属に任用されたという。その後彼らは1945年7月に台湾へ移動していった²。沖縄戦前ではあるが西表炭鉱で台湾人と朝鮮人が働いていた。また多少性質が異なるが1945年西表に駐屯していた日本軍が遭難した船の積み荷を強奪したうえ、乗組員であった朝鮮人と中国人を酷使し、終戦になるや鹿川に置き去りにして殺したという安東丸事件も知られているところである³。

今回言及する分野は沖縄戦に動員された朝鮮人軍人軍属についてである。これまで明らかになった資料から配置部隊と配置数及びその特徴を見ると共に、朝鮮人部隊であった特設水上勤務隊（以下「水勤隊」）の編成から沖縄で港湾作業につくまでを辿ってみる。

1. 32軍に配置された朝鮮人

(1) 「朝鮮人軍夫」という表現は妥当か？

沖縄戦に連行された朝鮮人について言及する場合、沖縄では一般的に「朝鮮人軍夫」と表現することが多いが、この言葉の理解が人によってまちまちである。労務動員（民間雇用）された朝鮮人が軍の雑役をしていたと見たり、沖縄戦に動員された朝鮮人はみな「軍の雑役夫」だったと漠然と理解していたりする。実際「朝鮮人軍夫」という用語についての定義はこれまでどこからも示されたことがなかった。果たして沖縄戦に動員された朝鮮人を「朝鮮人軍夫」と表現するのは妥当なのだろうか？

そもそも「軍夫」とは何か。作業内容からくる職種としての「軍夫」なのか、「軍夫」という雇用上の身分なのか、また朝鮮人以外に「軍夫」はいたのか、さらには軍との関係はどうなっていたのか、定義のはっきりしない「軍夫」について整理する必要がある。

最初に、日本軍の戦時資料から見ると、「軍夫」という用語が頻出するのは『船舶軍（沖縄）留守名簿』⁴である。この名簿には船舶関係の朝鮮人約2,800名が収録されており、主な部隊としては特設水上勤務第101～104中隊である。この名簿の「役種兵種官等並給級俸月給額発令年月日」欄に1人1人の発令年月日と俸給額、および役種兵種官等が記録されていて、水勤隊の場合、身分は軍属であるがこの欄への記入の際は「軍夫」、「傭人」、「臨時傭人」、「工員」⁵、などとなっている。必ずしも全員が「軍夫」というわけではない。

もう一つ「軍夫」という言葉が出てくるのは「特設水上勤務第104中隊陣中日誌1944年9月」⁶である。日誌には毎日現在員数が将校、下士官、兵、軍夫ごとに分けられ報告されている。この部隊はいわゆる「朝鮮人軍属の部隊」であり、留守名簿から見ると、その大部分は臨時傭人でその他に工員が1人、傭人が1人、軍夫とされるものが5人いる。したがって陣中日誌に報告されている「軍夫」数というのは留守名簿で軍夫と記録された員数ではなく、朝鮮人軍属数のことである。それを「軍夫」としているのは104中隊の軍属の性質（職種）を「軍に所属する人夫」つまり「軍夫」と見ているからだ。日々の日誌においても、軍夫○人が作業につく、軍夫誰それを看護にあたらせる、などと言った使われ方をしている。この陣中日誌の「行動の概要」に「無学文盲なる朝鮮軍夫（ママ）の教育訓練に従事する」とあり、同じ陣中日誌の附表2に朝鮮人軍属の編成表があるのだが、名簿名は「軍夫編成表」となっている。朝鮮人に対する蔑視と職種への軽蔑が入り混じって「軍夫」と称されている。

他方で同じ特設水上勤務第104中隊の第2小隊の陣中日誌⁷では、総員数や現在員数を記入する際、将校、下士官、兵、軍属に区分し、朝鮮人を軍属としてその員数を記入している。この陣中日誌では「軍夫」という言葉が一切使われていない。すべて軍属○人、軍属誰それ、などと正式に書かれている。

32軍防衛築城隊の牟田隊は360人程の部隊であるが、日本人軍属と朝鮮人軍属89人が混在する軍属部隊である。「防衛築城樋口隊史実資料」（樋口隊は牟田隊の中にある隊で朝鮮人軍属も所属している）にある「樋口隊編成表」では「傭人誰それ」という形で記録されている⁸。この部隊は嘉手納飛行場や読谷飛行場建設を担った部隊であり、職務内容からいえば「軍の人夫」に近いが、牟田隊の留守名簿（注8参照）の「役種兵種官等並等給級俸月給額発令年月日」欄に軍夫という記載はない。職務内容が具体的に書かれており、朝鮮人軍属の場合現場手が最も多く53人、次いで自動車手13人、そのほか機械工、自整備手等の技術職が続く。記録上「軍夫」という言葉は見当たらない。

防衛庁防衛研修所戦史室がまとめた『沖縄方面陸軍作戦』⁹の中に、1944年10・10空襲の被害について「陸軍関係の人夫約120名が死亡し…」と述べているくだりがある。ここでの「人夫」が朝鮮人であるかどうかははっきりしない。一方で「慶良間列島の戦闘」の項では、「特設水上勤務隊（朝鮮人軍夫部隊）」「朝鮮人軍夫約300名」などと言った書き方をしている。書籍全体で「軍夫」という言葉はここにしか出てこない。朝鮮人と軍夫は不可分の関係で一つの言葉となっているようだ。

以上を簡潔にまとめると、水勤隊101～104中隊の留守名簿「役種兵種官等」欄に「軍夫」との記載があるが、全員が軍夫というわけではなく、一方水勤隊104中隊においては留守名簿表記上の「軍夫」とは関係なく、朝鮮人すべてを「軍夫」と称した。しかし104中隊第2小隊では公式記録上（陣中日誌）は朝鮮人を「軍夫」とせず「軍属」として記録した。また32軍防衛築城隊牟田隊では、記録上「軍夫」という職務内容はない。

一方、私たちが沖縄戦の朝鮮人を表現する場合、「軍の雑役的な単純肉体労働」を強いら

れたのだから「朝鮮人軍夫」と表現するのは間違いではないとする考えも方もある。今では使用されなくなった「人夫」「雑役夫」に近い感覚での使用といえる。確かに水勤隊の場合は後方部隊として港湾業務、坑木伐採、陣地構築、軍需物資・弾薬輸送などに酷使されたが、しかしこうした作業は水勤隊に限らず後方部隊の陸上勤務隊や輜重隊など兵站部門の任務とも共通する。さらには地上戦が始まると、職種的な意味での「軍夫」の枠を超えて、戦闘部隊に再編成され、多くの朝鮮人が戦場で命を落とした。「朝鮮人軍夫」という呼称は、こうした戦場での朝鮮人の実態を見えにくくする。

また、水勤隊以外で軍属動員された朝鮮人は、32軍防衛築城隊の場合、先に見た通り軍隊内でさえ「軍夫」とされていなかった。にもかかわらず彼らを私たちが「朝鮮人軍夫」と言い換える必要があるだろうか？

沖縄戦ではこれまで検討してきた朝鮮人軍属だけでなく、朝鮮人兵や士官学校卒の職業軍人もいた。したがって沖縄戦に動員された朝鮮人をイコール「朝鮮人軍夫」とするのは間違いであるし、また「朝鮮人軍夫」に言及する場合はその定義を提示し、対象を明確にする必要がある。水勤隊に所属していた金元栄の手記『朝鮮人軍夫の沖縄日記』¹⁰はもともと「或る韓国人の沖縄生存手記」という冊子が単行本化される過程でタイトルが変わってしまった。「朝鮮人軍夫」という用語については検討し直す時期に来ているのではないかと考える。

(2) 朝鮮人が沖縄戦に動員された背景

沖縄への朝鮮人連行は一体どのような根拠に基づいていたのだろうか？

1939年、日本では国家総動員法に基づき労務動員と軍属動員が可能となる国民徴用令が公布されたが、朝鮮半島から日本への労務動員については、1944年9月から適用されることとなった。拡大するアジア侵略による人的需要の高まりの中で、朝鮮半島から鉱山や軍需工場、基地建設等への動員が図られていった。労務動員は日本政府主導で動員計画が進められ、初めは募集形式で、1942年になると官斡旋方式で行政の関与が一層強化されていった。1944年9月には本格的に徴用令が適用、動員されていった。その数は全体で80万人と推定されている¹¹。一方軍属の動員は戦争の拡大とともに1941年ごろから始まり、占領地の土木作業や飛行場建設、捕虜の監視などに次々と送り込まれていった¹²。沖縄への軍属動員は特設水上勤務隊の場合、1944年6月に計画が各郡に知らされ7月に実施されている¹³。

一方、兵としての動員の方を見ると、朝鮮に徴兵制が施行されたのは1944年になってからである。1938年から陸軍は陸軍特別志願兵制で、海軍は1943年から海軍特別志願兵制で、また1943年からは朝鮮人学徒特別志願制で動員が始まっている。沖縄の32軍が創設されたのは1944年3月で、6月から9月をピークとして部隊の配備がなされていった。沖縄戦に動員された朝鮮人は主に「満州」や「北支那」から移動してきた24師団、28師団、62師団に所属しており、部隊と共に沖縄に移動してきた。朝鮮半島では1944年に徴兵制が施行され、4月から第1回徴兵検査が始まり8月まで続いた。同時に予備訓練が始まり、9月から実際に配属されていったとする塚崎昌之2004年¹⁴や樋口雄一2001年¹⁵の研究がある。沖縄への部隊配備

の時期を考えると、沖繩戦に動員された朝鮮人兵たちは、この徴兵制実施以前の志願兵制度による動員と考えるのが自然だろう。また独立工兵第66連隊は京都で7月に編成され9月沖繩に移動して来たが、この部隊に所属していた金上等兵は東京の私立大学を出たということであり¹⁶、同じ部隊の文サンチョは中央大学在学中に入隊した¹⁷。同じく千葉で7月編成された野戦高射砲第80大隊に所属していた金山ヨシオは東大卒である¹⁸。日本に留学していた学生も学徒志願兵として沖繩戦に動員されたとみられる。屋嘉捕虜収容所の朝鮮人専用テントに、留学生であったかは不明であるが学徒兵が3人いたとある¹⁹。

ところで志願兵は「親日派」として自発的に志願したかに思われがちだがそうではない。この制度は朝鮮全体を皇民化していく上で巧妙な役割を持たされた制度であった。皇国臣民化のパロメータとして目標数を達すべく、強引な勧誘がなされた。一方では日本の朝鮮半島からの米をはじめとした物資の根こそぎ収奪によって生じた貧困層が志願せざるを得ない状況に追い込まれた背景があった。志願とは名ばかりであった²⁰。

(3) 第32軍へ配置された朝鮮人 その手がかりとなる名簿

沖繩戦において沖繩本島を含め南西諸島²¹の守備については陸軍の第32軍である。戦時には海軍沖繩方面根拠地隊もこの指揮下に入った。32軍に配置された朝鮮人について、その部隊名と動員数を竹内康人（2012年）が初めて明らかにした。日本から韓国政府に渡された朝鮮人名簿を直接閲覧、分析し、「沖繩・朝鮮人動員部隊一覧 陸軍」、「沖繩戦朝鮮人動員部隊名」を発表した²²。また海軍については韓国の強制動員被害調査・支援委員会の作成した「旧海軍軍属配置現況（日本地域内分布）」（2012年）を集計、分析し発表した²³。さらに日本政府から韓国に渡された被徴用死亡者連名簿²⁴に独自の調査や資料などから死亡者を追加し名簿を作成した²⁵。これによって日本国内での死亡者の所属部隊名、死亡日、死亡地などが明らかになり、沖繩戦への朝鮮人動員状況やその犠牲の状況を知ることができるようになった。

① 日本政府が韓国に渡した朝鮮人軍人軍属名簿

1990年、盧泰愚大統領は日本政府に対して正式に朝鮮人徴用・徴兵者の名簿引き渡しを要請し、これに対して日本政府は1991年と1993年に労務関係、軍人軍属関係の名簿を韓国政府に渡した。韓国ではこれらの名簿を国家記録院において整理を進め、2005年「日帝強占下強制動員被害真相究明委員会」（政府組織）が設立されると、この委員会でデータベース化がすすめられた。この組織は2010年、5年時限立法で「対日抗争期強制動員被害調査及び国外強制動員犠牲者等支援委員会」へと変わり、2016年2月にその業務を終了した。

又、死亡者名簿については、厚生省が「旧日本軍在籍朝鮮出身者死亡者連名簿」を作成し、1971年韓国政府に渡した。韓国の財務部が「被徴用死亡者連名簿」として整理した。

現在、国家記録院では、データベース化されたこれらの名簿を「日帝強占期被害者名簿」として公開しており、インターネットでも見ることができる。名簿の引き渡し時期と種類、収録されている人数を知ることができ、また被害者及び犠牲者の氏名、生年月日、本籍地（郡まで）、連行地、合祀の当否、死亡の当否、供託金の7項目を知ることができる。

② 韓国に渡された名簿と、名簿に収録された人数

日本から渡された名簿から陸・海軍への軍人軍属動員の総数が推定できる主要な名簿としては以下の3種類で、その人数は以下の通りとなる。(数字は韓国国家記録院が公開している数字)

陸軍関係 「留守名簿」(114冊) (陸軍/軍人・軍属あわせて) 160,648人

海軍関係 「軍人履歴原表」 (海軍/軍人)

海軍関係 「軍属身上調査表」 (海軍/軍属) 海軍軍人軍属計100,788人²⁶

陸海軍の総数は261,436人となる。

この他に韓国に渡された軍人軍属関連の名簿としては「軍属名簿」(工員名簿)、「臨時軍人軍属届」、「兵籍戦時名簿」、「軍属船員名簿」、「病床日誌」、「俘虜名簿」などがあるが上記の名簿と重複しているとみられ、動員数に反映させるためには厳密な照合作業が必要だ。

この陸海軍の軍人軍属合わせた約26万人という数字は実際の動員数とは大きな開きがある。竹内康人はこの名簿外にも朝鮮人は動員されているとし、その根拠を1956年外務省アジア局第1課が作成した「朝鮮人戦没者遺骨問題に関する件」の中ででてくる朝鮮人軍人軍属は海軍陸軍含め約377,000人とする資料に求めている²⁷。この資料は日韓交渉に臨むために日本側が作成した内部資料の一部であるが、1962年の日韓交渉時には日本政府は軍人軍属の総数を約240,000人とした。全体で約13万人余少ない。その理由として竹内は、陸軍においては「名簿・外」者約114,000人が数字から消され、海軍においては「もと朝鮮籍の旧海軍軍人軍属員数表」にある氏名不詳者約20,000人が除外されたなどと分析を進め、軍人軍属の動員数は陸海合わせて37万人を超えると推定した²⁸。

(4) 竹内康人が明らかにした沖縄への動員数²⁹

① 陸軍の動員数

日本政府が韓国に渡した陸軍軍人軍属の「留守名簿」は全部で114冊あり、うち沖縄に関係する名簿は以下の3冊である

(a) 『船舶軍(沖縄)留守名簿』

この名簿はすべて沖縄関連分で約2,841人が記載されており、その主な部隊は特設水上勤務第101～104中隊、海上挺進基地27大隊等。

(b) 『第3航空軍(南西)第4航空軍(比島)第6飛行師団(濠州)第31軍(中部太平洋)第32軍(沖縄)留守名簿』

この中に沖縄関連者数として約94人みられ、部隊としては第1～3独立整備隊(第5野戦航空修理廠第1支廠)、第17船舶航空廠等。

(c) 『島嶼・島嶼軍留守名簿』

この中に沖縄関連者数が約256人、部隊としては32軍防衛築城隊等ほか。

以上3冊の名簿の中から竹内康人が沖縄の朝鮮人が配置された部隊とその人数を抽出し「沖縄・朝鮮人動員部隊一覧 陸軍」を作成した。これによると配置された部隊は54部隊で合計3,191人となる。

② 海軍の動員数

日本政府から1993年に渡された海軍軍属の名簿「旧海軍軍属身上調査表」から韓国の強制動員被害調査・支援委員会が「旧海軍軍属配置現況（日本地域内分布）」を作成した（2012年）。ここでは海軍朝鮮人軍属の日本国内への動員状況がわかる。これを竹内康人がさらに集計した。これを見ると沖縄・奄美へ連行された朝鮮人は佐世保に連行された中に含まれていることがわかり、筆者が沖縄関連（南西諸島）を抽出した結果270人となった。その主な部隊は、第226設営隊、第228設営隊、佐世保運輸部（沖縄）、沖縄根拠地隊などである。海軍軍人2名（沖縄海軍航空隊1、攻704飛行隊1³⁰）と合わせて、海軍軍人軍属の合計数は272人になる。

③ 陸海軍の軍人軍属動員数

以上の①と②の合計により、陸軍・海軍の朝鮮人軍人軍属の沖縄への動員数が3,463人であることが分かった。この数字は日本政府が韓国政府に渡した名簿約26万人分からの集計であり、最低でもこれだけの動員があったという数字としてとらえる必要がある。又、留守名簿自体に重複記載があったり、部隊員数が名簿ごとに書かれている場合もあるが実際の記載数と異なっていることもあり、数字はあくまでも概数である。

(5) 名簿で見る沖縄戦で犠牲になった朝鮮人

① 竹内が作成した死亡者名簿

日本政府が韓国に渡した「被徴用死亡者連名簿」（創氏名で記載されている）には21,700人分が記載されている。日本政府が認定した死亡者ということだ。この名簿を含め、竹内康人は各地の市民団体が調査し判明した死亡者やまた資料、文献等から死亡者を集め、日本国内で死亡した朝鮮人名簿「強制連行期朝鮮人死亡者名簿」（以下「竹内編死亡者名簿」）を作成し発表した³¹。この中に「沖縄・南西分」として712人の氏名を見ることができる。このうち203人は、平和の礎に朝鮮名で刻銘されているが氏名以外が不詳の者である。平和の礎刻銘者は「被徴用死亡者連名簿」と殆んど重複しているため³²死亡者の実数を推定するうえでここではこの分を712人から除いた。すると509人になる。

② 上記集計の中に入っていない死亡者がわかる名簿等

「竹内編死亡者名簿」の元資料となったもの以外に次のような名簿がある。

ア 「船舶軍（沖縄）留守名簿」特設水上勤務隊101～104中隊、海上挺進基地27大隊等、
イ 「旧日本軍在籍朝鮮出身死没者名簿（陸軍）（海軍）」沖縄分、陸軍304人、海軍103人、
合計407人

ウ 「太平洋戦争における宮古島戦没者名簿・都道府県別」宮古市町村会、朝鮮人が71名

エ 「納骨者名簿（一部）」豊兵団隷下配属各部隊戦友会、朝鮮出身者の部70人分（宮古島）

オ 「特設水上勤務第104中隊第2小隊陣中日誌」2人死亡の記録あり

カ 「太平洋戦争捕虜収容所埋葬者リスト、埋葬地別（沖縄）」NPO法人戦没者追悼と平和の会作成、元資料はアメリカ国立公文書館所蔵

アの「船舶軍（沖縄）留守名簿」は日本政府が韓国に渡した114冊の名簿の中のひとつで

あることは前述したが、特設水上勤務第103中隊に所属した姜仁昌が慶尚北道英陽に「太平洋戦争・沖縄戦被徴発者恨之碑」を建立する際、この名簿を探し出し複数部複製した。この名簿の上段欄外に戦死についてのメモ書きがあり、死亡月日と死地が記されている。この死亡者を集計したところ全体で281名となった。このうち「竹内編死亡者名簿」と重複している分を除くと新たに175人の死亡がわかった。

カの「太平洋戦争捕虜収容所埋葬者リスト、埋葬地別（沖縄）」は、英字表記の埋葬者名がカタカナ表記にされて、身分、死亡日と共にインターネット上で公開されている。埋葬者237名中、7人の朝鮮人と思われる名前がある。身分の内訳は、軍属が3人、不明が4人。日付は1945年12月9日から1946年2月1日の間であるが、この時期の朝鮮人死亡者名が明らかになったのは初めてである。この7人（推定）も新たに判明した分である。

以上2点のア、カ以外のイ、ウ、エ、オの名簿等から分かる死亡者はすべて「竹内編死亡者名簿」に含まれていた。したがって新たに判明した死亡者合計数は182人となり「竹内編死亡者名簿」にある509人と合計すると691人となる。沖縄戦の死亡者が691人まで明らかになったと言うことになる。

(6) 以上に基づき、沖縄戦で朝鮮人が配置された部隊及び人数、判明した死亡者数を一覧表に作成した（表1～表5）。この表の基本は竹内が研究して発表したもの（南西諸島分）に基づいたものであり、さらには追加判明した死亡者を付け加えた。

尚、表を見ると、動員数がわかっていないが死亡者がいる部隊がある。本来は動員数に加算されるべきだがここではそのままとした。また沖縄に配置された部隊ではないが、特攻隊や船舶での犠牲者もここに集計されている。

名簿等から見る沖縄戦朝鮮人動員数と死亡者数（南西諸島）

〈表1、2、3、4、5 共通〉

- ・動員数は、陸軍については竹内康人編『戦時朝鮮人強制労働調査資料集2』（神戸学生センター、2012年）に基づく
- ・海軍については竹内康人『調査・朝鮮人強制労働③発電工事・軍事基地編』（社会評論社、2014年）に基づき筆者集計
- ・死亡者数は竹内康人『戦時朝鮮人強制労働調査資料集増補改訂版』神戸学生センター、2015年）に基づく
- ・追加死亡者数は筆者が「船舶軍（沖縄）留守名簿」「太平洋戦争捕虜収容所埋葬者リスト」に基づき新たに追加

表1 【陸軍 / 軍人・軍属の部】

部隊名	人数	死亡者	*追加死亡者	死亡年月日等	部隊編成、移動、死亡地等
24師団歩兵22連隊	6	4		1945.4～6	満州東安から移動/死亡 西原1人、中頭2人
24師団歩兵32連隊	9	8		1945.4.29～30、3人/ 5月3人/6月1人/ 8月1人	満州揚崗から移動/死亡 首里、西原、前田、高嶺
24師団歩兵89連隊	12	15		1945.5.4、5人、 その他は4～6月	満州東安から移動/死亡 浦添5人、西原7人、前田1人、高嶺2人
24師団制毒隊	8				満州東安から移動
5野戦航空修理廠 第1独立整備隊	25				湾19023/（徳之島）

部隊名	人数	死亡者	*追加死亡者	死亡年月日等	部隊編成、移動、死亡地等
5野戦航空修理廠 第2独立整備隊	19	3		1945.8.8.2人/ 5.27.1人	湾19023/(宮古島)死亡 宮古8月8日2人、5月27日南風原1人
5野戦航空修理廠 第3独立整備隊	28	7		1945.5.18~3人/6月 3人/8月1人	湾19023/(本島)死亡 首里、真壁、真榮里、 南風原、宮古
5野戦航空修理廠 石垣戦闘修理班	1				北支那から上海集結 1944.8.16出発
62師団独立歩兵11大隊	2				北支那から上海集結 1944.8.16出発
62師団独立歩兵12大隊	4				北支那から上海集結 1944.8.16出発
62師団独立歩兵14大隊	2				北支那から上海集結 1944.8.16出発
62師団独立歩兵15大隊	1	2		1945.4.23.5.9	北支那から上海集結 1944.8.16出発/ 浦添で2人死亡
62師団独立歩兵21大隊	2				北支那から上海集結 1944.8.16出発
62師団独立歩兵22大隊	1				北支那から上海集結 1944.8.17出発
62師団独立歩兵23大隊	1				北支那から上海集結 1944.8.18出発
62師団防疫給水部	1				
32軍司令部		1		1945.5.30	小禄で死亡
32軍野戦兵器廠	1				
32軍貨物廠	2	1		1945.6.10	首里で死亡
32軍司令部防衛築城隊	91	61		松川1945.5.14~17、 12人死亡/6.20.26人死亡	関東軍築城部から増加要員として臨時編成 /1944.8.25本島上陸、本部及び第1~第3 中隊は本島配備 6.20死亡は糸満、山城
32軍防衛築城隊第4中隊	36		2	1945.4.14	第4、第5中隊は宮古配備
32軍防衛築城隊第5中隊	33			1945.8.23病死	
32軍航空情報隊	2				
戦車第27連隊	3	2		1945.5.10首里/ 1945.6.11真栄平	球12102/満州勃利から本島19.7.12上陸 (主力)/第3中隊宮古
独立工兵66大隊	9	6		1945.4~6月	京都で編成/首里4人、小渡1人死亡
独立重砲兵100大隊	1				
第10野戦気象隊		2		1945.6.19.6.23	主力は台湾/真栄平で死亡
野戦高射砲81大隊	3	1		1945.6.23	与那原
陸上勤務71中隊	1				
21航空通信連隊	1				誠19159
特設水上勤務第101中隊	581	73	2	1944.3.1.56人	宮古70人、石垣3人死亡 他 留守名簿は海上挺進基地第27大隊であるが 死亡の際は101中隊となっているものも含む
特設水上勤務第102中隊	715	16	90	1945.4.4人/ 1945.5.11人/ 1945.6.80人	大邱出発徳之島・奄美大島へ、1944.12本島へ/ 山城65人、内6.20死亡が58人、摩文仁3人、 喜屋武6人、東風平8人死亡
特設水上勤務第103中隊	691	22	13		本島から1945年2月阿嘉、慶留間、座間味へ 移動、阿嘉島31人死亡、内1945.3.27.20人 死亡/1945.10.10那覇2人、座間味1人
特設水上勤務第104中隊	675	5	69		1945.5.7~9首里山川で8人/ 真壁村新垣で58人、内6.20に50人死亡
28師団輜重兵28連隊	6	2		1945.1.22/1945.6.21	宮古共に戦病
28師団司令部	1				宮古配備
28師団通信隊	2				宮古配備
28師団歩兵3連隊	13				宮古配備
28師団歩兵30連隊	1				宮古配備
28師団騎兵28連隊	1				宮古配備
118独立整備隊	1	1		1945.4.7	湾18983/伊江島死亡
独立混成第45旅団司令部	3				
独立飛行23中隊		1		1945.3.26	
独立歩兵39大隊		1		1944.10.14	宮古死亡
飛行20戦隊		1		1945.5.29	特攻
飛行2戦隊		1		1945.4.6	特攻
飛行66戦隊		1		1945.4.2	特攻
飛行79戦隊		1		1945.4.6	特攻
誠120飛行隊・慶良間		1		1945.5.12	特攻

部隊名	人数	死亡者	*追加死亡者	死亡年月日等	部隊編成、移動、死亡地等
6 航空軍第106辰武隊		1		1945.5.4	特攻
6 航空軍第113辰武隊		1		1945.6.6	特攻
6 航空軍第431辰武隊		2		1945.5.27/28	特攻
6 航空軍第51辰武隊		1		1945.5.11	特攻
80航空軍第80辰武隊		1		1945.4.22	特攻
6 航空軍第77辰武隊		1		1945.4.28	特攻
8 飛行師団誠32飛行隊		1		1945.4.3	特攻
8 飛行師団誠41飛行隊		1		1945.3.29	特攻
中央航空路部沖繩管区	5	1		1945.6.20	風18918
第19航空地区司令部	1				
第69飛行場大隊	1				
第1陸軍航空技術研究所	1				
第17船舶航空廠	9	9		1944.1.10	全員同日死亡 死因は3名が魚雷
海上挺進第26戦隊	1				特攻
海上挺進第2戦隊	1				特攻
海上挺進第3戦隊	1				特攻
海上挺進基地第4大隊	2				
海上挺進基地第27大隊	154		1		
船舶工兵23連隊	2				
船舶工兵26連隊	7	5		1945.5.3~1945.6.20	死亡嘉手納、大里、南風原、座間味で各1人
7 野戦船舶廠第1支廠 (俗称 沖繩支廠)	11	9		1945.5.10.6人/ 1945.6.20/21	1945.5.10に5人前田、1人が首里、 6.20/21は摩文仁で死亡
1 船舶輸送司令部		9			6.20摩文仁3人死亡
2 船舶輸送司令部					
3 船舶輸送司令部					
4 船舶輸送司令部					
7 船舶輸送司沖繩支部		1		1945.5.10	首里で死亡
船舶司令部		2		1945.1.22宮古南西/ 1945.6.21	
船舶残務整理部		1		1945.8.14	
東泰丸・船舶司		1		1943.12.13	
柏丸・船舶司		1		1944.10.10	
春日丸・3船舶司		1		1944.10.10	
興順丸・船舶司		3		1944.8.27	3人同日に死亡
清進丸・1船舶司		1		1945.6.20	摩文仁
祥新丸・船舶司		1		1945.1.21	宮古、空爆
瑞祥丸・船舶司		1		1944.10.1	南西諸島
玉鉾丸・船舶司		1		1944.6.24	南西諸島
垂水丸・船舶司		1		1945.6.20	摩文仁
筑紫丸		1		1945.3.18	
南京丸		1		1945.3.17	
南陽丸・船舶司		4		1944.10.10.4人	
大和丸・船舶司		1		1945.6.20	摩文仁
旭丸・船舶司		1		1944.10.12	
海州丸・船舶司		1		1945.6.21	
経運丸・船舶司		1		1944.12.19	
鳥海丸・船舶司		2		1945.4.20/6.12	
彦山丸・船舶司		1		1945.1.22	那覇沖
民祐丸・2船舶司		1		1943.7.23	宮古
洋島丸・船舶司		1		1944.10.18	
8 竹丸		1		1945.1.22	宮古
馬來丸		2		1945.1.25	久志湾 魚雷
紀運丸・船舶司		1		1944.12.19	
①動員判明分	3,191	317	175	②死亡判明分合計	492

表2 【海軍の部（軍人軍属）】

部隊名	人数	死亡者	死亡年月日	備考
第228設営隊 奄美大島	135	2	1045.6.20	2人同じ日
第226設営隊 沖縄	49	36	1944.2.20～ 1945.6.30	小禄で死亡が28人、その内6.13～14に死亡が14人/5.15～6.12死亡11人
沖縄根拠地隊 沖縄本島 (船舶27、輸送隊16)	43	23	1945.6.14	全員同じ日 豊見城で死亡
佐世保運輸部 沖縄	26			
第21航空廠	4			
佐世保防備隊 沖縄4、奄美3	7			
佐世保施設部 沖縄1、奄美2	3			
第227設営隊 奄美1、沖縄1	2			
攻704航空隊(軍人)	1	1	1945.6.25	南西諸島
沖縄航空隊(軍人)	1	1	1945.6.14	
佐世保軍需部	1	1	1945.6.14	摩文仁
横須賀運輸部	1	1	1944.1.17	南西諸島
第22海軍輸送隊	2	44.11.8、1人/ 44.7.8、1人		
護国丸第21輸送隊	1	44.11.8		
江竜丸		1	1944.10.10	
大里丸		1	1944.9.17	
興安丸		5	1945.6.14 豊見城2人/ 1945.3.5.1人/ 1945.5.14.1人/ 1945.1.22.1人	
興東丸		1	1944.5.3	南西諸島
呉羽丸		1	1945.1.22	南西諸島
興亜丸		1	1945.2.20	石垣
興産丸		1	1945.4.25	南西諸島
興隆丸		2	1945.4.17	
大仁丸		3	1944.2.20	全員神島
大漁丸		1		
千歳丸		6	1945.6.14.5人/ 1945.1.27.1人	
東亜丸		1	1945.1.22	
日安丸		1	1944.9.8	石垣島西
昇運丸		2	1945.1.22/ 1944.5.3	南西諸島
春光丸		2	1945.3.28	那覇港
播州丸		1	1945.5.25	
彦山丸		1	1945.1.22	那覇沖
焼津山丸		1	1945.3.1	宮古沖
八代丸		2	1945.1.22	南西諸島
和神丸		1	1945.4.4	
海軍の不明船		1		
③動員数判明分	272	104	④死亡判明分	

以上の他に、
第226設営隊 31人 1944.5.5本州南東地域で死亡

表3 【陸海軍所属不明の部】

	死亡者	追加死亡者	死亡年月日	備考
大海丸（海軍？）	1		1944.10.10	那覇付近
北新丸（海軍？）	1		1944.10.10	
一心丸（海軍？）	2		1944.1.2	魚雷 中之島水道
竹丸（陸軍？）	1		1945.6.20	
泰仁丸（海軍？）	4		1944.3.12	北大東沖
玉嶺丸（海軍？）	2		1943.12.20	魚雷
江龍丸	1		1944.10.10	那覇沖
久米島住民	1		1945.8.20	虐殺
船員（船名不明）	3		1944.10.10/ 1945.6.20/1.22	氏名判明 内2人は住所も判明
太平洋戦争捕虜収容所埋葬者リスト		7	1945.12.9～ 1046.2.1	
	16	7	⑤死亡判明計	23人

表4 【その他の南西諸島】

	人数	死亡者	死亡年月日	備考
歩兵46連隊		6	1945.1.25	輸送船沈没 鹿児島沖
野砲24連		1	1945.1.25	鹿児島沖
飛行66戦隊		1	1945.3.30	中之島沖
工兵18連隊		3	1945.1.25	川辺南方海
船舶司 11星丸		1	1945.3.1	久慈湾
船舶司 進漁丸		1	1945.1.22	名瀬沖
八光丸		31	1944.11.3	魚雷 屋久島沖
6航空軍司令部		1	1945.6.19	徳之島付近
慶山丸トカラ		4	1945.3.1、3人/ 3.10、1人	宝島錦田 内平和の礎刻 銘1人
呉運輸部 興西丸		1	1943.11.11	奄美
興西丸		13	1943.11.11	
でらごあ丸		1	1943.11.2	種子島南西 魚雷
南方政務部		2	1944.1.2	奄美大島北
佐世保運輸部		4	1944.10.22.3人/ 45.3.1.1人	奄美大島近海
華頂丸		1	1945.3.23	奄美大島
九州南方		1	1945.7.28	
		72	⑥死亡判明分	

表5 【総合計(南西諸島分)動員数と死亡者数(判明分)】

	動員数	死亡
陸軍軍人軍属	3,191①	492②
海軍軍人軍属	272③	104④
陸海所属不明		23⑤
その他の南西諸島		72⑥
合計	3,463	691

(7) 動員部隊、動員数、犠牲者数から読み取れること

① 陸軍

陸軍では沖縄戦の主力部隊であった24師団、62師団、28師団の各歩兵隊に少数ずつ配置されている。日本軍の中で朝鮮人に武器を持たせることについて懸念され、少数分散配置されたようだが³³、沖縄の各師団でもそうであったことがわかる。また24師団歩兵89連隊では動員数、つまり名簿記載数が12人であるにもかかわらず、犠牲者は15人いる。動員数が必ずしも正確でないことがわかる。部隊に少数ずつ配置された朝鮮人がどこまで正確に朝鮮人名簿へと集約されたのか疑問が残るところである。

このほかに32軍直轄の独立工兵隊や、攻撃部隊である戦車連隊、野戦高射砲隊などにも少数配置されている。

第5野戦航空修理廠の第1～第3独立整備隊には20～30人ずつまとまった数で動員されており、宮古、徳之島、沖縄本島の各地に分かれて駐屯した。本島に配備された第3独立整備隊は米軍上陸後の5月から6月にかけて首里、真嘉比で6人死亡し全体で7人死亡した。この部隊についてはこれまであまり知られていなかったが竹内の研究により浮び上がった部隊だ。また32軍防衛築城第1～5の各中隊に朝鮮人が約30～40人ずつ軍属として配置され、全体で150～200人の規模となる。特設水上勤務隊に次いで動員数が多い部隊である。この部隊は1個中隊100人程の部隊で、関東軍築城部から増加要員として臨時編成され、1944年8月沖縄に上陸した。4、5中隊は宮古方面に、1～3中隊は沖縄本島に配置され、当初の主任務は飛行場建設、陣地構築であった。本島では読谷と嘉手納飛行場建設に動員され、そのほか通信施設づくりなどをした。32軍防衛築城隊の樋口隊（本島配備、中隊名は不明）史実資料³⁴では5月15日首里松川の戦闘に参加、「部隊多半戦死」「のち三田部隊と摩文仁まで行動す」とある。実際5月14～17日の間に集中して首里、松川、真嘉比、真和志地域で24人が犠牲になり、さらには6月20日に26人が死亡している。築城隊として動員されながら、32軍司令部が置かれた首里攻防をめぐる激戦に参加、のち南部摩文仁に追い詰められ多くの犠牲者を出した事がこの数字から読み取れる。この部隊についての資料も少ない。

また航空特攻隊となって知覧や万世、台湾から飛び立ち犠牲となった朝鮮の若者が13人数えられる。海上船舶でも犠牲になったものが多い。尚、彦山丸は本部の渡久地港に入港中攻撃を受けて、1945年1月22日浜崎の海で沈没した。この時の墓標の写真が残されており³⁵14人中少なくとも3人が朝鮮人乗組員である。当時15歳だった本部町健堅在住の中村英雄は沈没した彦山丸の犠牲者を火葬するため薪の調達を手伝い、同地に埋葬されたことを証言している³⁶。

② 海軍

海軍の特徴は第226設営隊に朝鮮人が49名、沖縄根拠地隊に43名が動員されていることだ。小禄にある海軍司令部壕は海軍第226設営隊によってつくられたといわれている。海軍の特攻艇秘匿壕は運天や金武などにも作られたが、この地域で当時朝鮮人が目撃されており、海

軍に動員された朝鮮人である可能性は高い。保坂廣志2013年³⁷によれば226設営隊について「正規海軍兵は200人余り、その他は沖縄にて防衛招集した兵士より成り立っていた。佐世保にて創設され1944年7月沖縄に到着した。」とある。226設営隊の朝鮮人は佐世保施設部より送られているのでこの200人の中に含まれているということになるが、朝鮮人は正規兵ではないとみられ、この人数とは別の可能性もある。海軍は大田司令官が自決したときに資料をほとんど処分したために、詳しいことがわかっていない。『沖縄方面海軍作戦』³⁸にも各部隊の構成や動きについての具体的な記載はほとんどない。

死亡の状況を見ると226設営隊の犠牲者は36人で死亡率が高い。その大半は海軍が小禄でほぼ全滅した6月中旬、同地区で死亡している。根拠地隊も死亡者が23人、6月14日豊見城で死亡している。海軍の壊滅と運命を共にした事がわかる。

226設営隊については、沖縄到着前の1944年5月5日、本州南東地域海上で31人戦死していることが分かった³⁹。死亡地が南西諸島でないために南西諸島分から数字がはじかれているが、沖縄への配備の過程での犠牲であったことは間違いないだろう。朝鮮半島もしくは南方にいた朝鮮人が佐世保に移動してくる途中、あるいは佐世保から沖縄への配備の途中攻撃された可能性がある。すると226設営隊に動員された朝鮮人は80人を超えていたことになる。ちなみに同日海軍関係の沈没船として白根丸が記録されている。呉鎮守所管の一般徴用船で5月1日佐世保を出発し、積み荷には設営隊諸材料も含まれ兵士も乗船していた。同月4日神戸を経て5日米潜水艦攻撃で和歌山県周参見町沖で沈没した。戦死者数船員25人、兵士443人と記録されている⁴⁰。226設営隊との関連が疑われる。

船舶での犠牲が多いことも特徴だ。全日本海員組合「戦没した船と海員の資料館」が公表している「都道府県別の戦没船員分布⁴¹」の朝鮮の部では陸海軍合わせて犠牲者数2,614人としている。沖縄戦関連犠牲者もこの中に含まれていることになる。

2. 特設水上勤務第101～104中隊 慶尚北道から沖縄へ

32軍の直轄部隊の中に、朝鮮人軍属で構成された特設水上勤務隊が4個中隊がいたことは前述した。この部隊については公開されている戦時資料や留守名簿からその全体像がかなり見えて来た。ここでは動員から沖縄への連行までを追っていく。

(1) 特設水上勤務隊が沖縄戦に動員された背景

1941年真珠湾奇襲攻撃で始まったアジア太平洋戦争もミッドウェー海戦での大敗を境に日本は劣勢に転化し、大本営はフィリピン、台湾、南西諸島防衛強化を打ち出していった。これに伴って1944年3月沖縄に32軍が創設された。7月にはサイパンが陥落し、いよいよ沖縄での地上戦が予想される事態となり、地上戦闘部隊の強化が進められた。8月上旬「満州」から24師団が、中旬には「北支那（中国北部・華北）」から62師団等の主力部隊が移動してきた。沖縄への部隊配置は7月～9月に集中し、短期間に7～8万人の兵力が一举に上陸するとともに、ただならぬ量の軍需物資が同時に送られてきた。武器、弾薬類はもちろんのこと航空

燃料、陣地構築資材、兵士の食糧、衣服、馬糧等々一切適切である。当時大型船が接岸できる港は那覇港くらいであり、それでもせいぜい4,500トン級が一隻、2,000トン級2隻が同時に接岸できる程度であった⁴²。大量の物資は沖合に停泊した船から小型舟艇に積み替えられ、陸揚げされた。この作業は人海戦術にたよるしかなく、こうした港湾作業に携わる要員として緊急に送り込まれてきたのが特設水上勤務隊だった。

(2) 慶尚北道から集められ沖縄に連行されてきた特設水上勤務隊

① 「船舶軍（沖縄）留守名簿」で見る水勤隊

「船舶軍（沖縄）留守名簿」は水勤隊を中心とした船舶関係の朝鮮人名簿である。この名簿に掲載された部隊と人数は表6のとおりである。

表6 船舶軍（沖縄）留守名簿 部隊別集計

	部隊名	人数	小計
1	海上挺進基地第27大隊	147	147
2	歩兵第154連隊補充隊	2	2
3	海上挺進戦隊（第2、第3、第26）	3	3
4	特設水上勤務第101中隊	591	水勤隊計
5	特設水上勤務第102中隊	702	
6	特設水上勤務第103中隊	683	
7	特設水上勤務第104中隊	670	
	合計	2,798	2,798

表6から水勤隊の各中隊は約700名前後で構成されていることがわかるが、101中隊だけ600名に満たない。「特設水上勤務第101中隊史実調査参考資料報告」では朝鮮人軍属数は700名であると記載されているにもかかわらずだ。一方海上挺進基地第27大隊だが、前掲「被徴用死亡者連名簿」や「太平洋戦争における宮古島戦没者名簿・都道府県別」（宮古市町村会編）ではこの部隊の者が101中隊所属とされ宮古島で死亡している。101中隊は宮古に配備されたが、27基地大隊は本島に配備された部隊である。こうしたことと考え合わせると、この名簿にある27基地大隊の朝鮮人は101中隊に所属していたと考えるのが自然だろう。したがって水勤隊の合計は2,793人、約2,800人といえることができる⁴³。

② 1944年7月大邱で編成された水勤隊

水勤隊各中隊については戦後32軍残務整理部等が作成した史実資料や史実調査参考資料などがある⁴⁴。それによると大邱の朝鮮第24部隊において、将校、下士官、兵と共に7月10日前後、部隊編成が完了している。ちなみに103中隊の史実調査参考資料報告（関東上陸地支局、昭和21年3月28日）では大邱24部隊召集、編成7月10日、将校5、下士官9、兵68、軍夫720名、小銃70、となっている。軍属数は実際の留守名簿登録数（表6）より37人多い⁴⁵。

③ 慶尚北道一帯から動員された若者たち

留守名簿からその居住地を見ると多少の例外を除き、慶尚北道となっている。1944年6月

17日慶尚北道の各郡守が道庁に集められ、そこで郡ごとの割り当動員数が示された。そして僅か一週間後の24日、大邱の公会堂に結集させるよう要求された⁴⁶。これほど大急ぎで人集めしなければならなかった背景には、前述したように沖縄での港湾作業要員のひっ迫した需要があったと考えられる。

こうして集められた若者たちの年齢は20～30歳である。カンジョンスクが留守名簿を生年別に集計したもの⁴⁷から年齢を推定したところ、一番多かったのは22歳の469人で、21～25歳の合計は1,895人になる。一家を支える若者たちだ。結婚して日がたっていない者、妻のおなかにいる子を残しての別れとなった者たちもいた。

④ 有無を言わせぬ強制動員

僅か一週間という短い期間での人集めは当然無理が伴う。本人の意向を聞いては割り当て達成は不可能である。結局徴用名簿に載ったものは有無を言わず連行された。当日になると朝早くから面事務所の者と巡査の二人がやってきて逃げられないよう見張り、引き立てて行った。しかし出頭命令など見なかったとする証言は多い⁴⁸。「村の夫役だから数日ですぐ帰れる」「いい仕事がある、金になる」などと軍に行くことを隠し連れて行った。出頭を拒む者、隠れる者に対しては非国民として懲罰されると脅し、出てこなければ親兄弟を身代わりに連れて行くぞ、といったやり口で逃れられないようにした。

姜仁昌は、大麦の刈り入れの最中面書記と警察官が来て英陽の警察署に連行された。「大邱の飛行場建設に連れて行くが、1か月長くても3か月で帰す」と言われ翌日の集合を命じられた⁴⁹。沈在彦は隣村に逃げたが、面の労務係や巡査が家に来て父親を責め立て、息子を出さなければ代わりに父親を連れて行くと言われ仕方なく出頭した⁵⁰。出頭命令書を持っていったが不在のため隣りに住んでいるものが身代わりに連れて行かれた場合もあった。馬淑鳳の身代わりになったものが沖縄戦で迫撃砲にやられ死亡したが、彼の本名は同僚の金元栄とも知らなかった⁵¹。

⑤ 相次いだ逃亡

大邱での訓練期間や移動の途中で逃亡が相次いだ。いかに意に反した動員であったかを示している。「船舶軍（沖縄）留守名簿」に「逃亡」の書き込みがある。集計したところ101中隊では22人、内訳は大邱－釜山間で17人、下関で5人が逃亡した。102中隊では大邱で24人、大邱－釜山間2人、下関で10人、計36人に上る。留守名簿の103中隊と104中隊に、逃亡についての書き込みがないが、大邱で103中隊の監視役をしていた学徒特別志願兵が夜こっそり逃亡の手助けをして大規模な脱走があったとカンジョンスクは述べている⁵²。103中隊の場合、留守名簿が編成時人数より37人少ない事を前述したが、この事件との関連が疑われる。104中隊の場合も逃亡はあった。カンスジンは、大邱にいるとき仲間の一人が塀を飛び越え逃げたが軍用犬に見つかり、皆の前に引きずりだされて竹刀で滅多打ちにされたと言っている⁵³。金元栄は大邱で102中隊の8人が一斉に逃亡するという3回目の逃亡事件のことを書いている⁵⁴。翌日見つかった一人が皆の前に引きずりだされて来たが、顔が変形し立つこと

もできない状態だったということだ。

(3) 特設水上勤務隊の部隊構成

① 1個中隊の構成

1個中隊は3小隊と指揮班からなる。1個小隊は3分隊から構成され約210人、1個分隊は70人で、さらに3組に分かれた。1組は23～4人で最小単位となる。組の責任者として組長が、分隊の責任者として軍夫長が朝鮮人の中から選ばれた。さらに一組に日本兵が一人ずつ配置され班長と呼ばれた。金元栄は組長、徐正福は軍夫長だった。104中隊の1944年9月陣中日誌附表にある「軍夫編成表」を集計し1個中隊の構成を表した(表7)。

表7 特設水勤勤務隊 1個中隊の朝鮮人軍属構成(特設水勤勤務第104中隊668人の場合)

指揮班 32人 (軍夫長1人+組員31人)			第1小隊 212人			第2分隊 70人 同左	第3分隊 70人 同左	第2小隊 211人 同左	第3小隊 213人 同左
			第1分隊72人 (軍夫長1人+組員71人)						
1組 11人 内1人組長	2組 10人 内1人組長	3組 10人 内1人組長	1組23人 内組長1人	2組25人 内組長1人	3組23人 内組長1人				
班長1人 (日本兵)	班長1人 (日本兵)	班長1人 (日本兵)	班長1人 (日本兵)	班長1人 (日本兵)	班長1人 (日本兵)	同左			

*軍夫長、組長ともに朝鮮人軍属の中から選ぶ、1組に1人日本兵の班長がつく
「特設水勤勤務第104中隊陣中日誌 1944年9月 附表第2 軍夫編成表球第887部隊」より集計

② 1個中隊、1個小隊の軍人配置数

1個中隊の日本軍軍人構成と人数は、104中隊の場合、将校6人、下士官15人、兵40人の計61人である。全体構成はこの61人と朝鮮人軍属668人の計729人ということになる。また104中隊の第2小隊の場合、将校1、軍曹1、伍長2、兵長3、上等兵4、二等兵2、衛生兵1の計14人、そして朝鮮人軍属が211人、全体としては225人であった。

軍人や兵については朝鮮の大田鉄道に長らくいた日本人や朝鮮語が流ちょうな日本人がいた⁵⁵というから朝鮮の現地で召集されたのだろう。中には朝鮮人もいた。志願兵であった金茂元一等兵は普段日本兵らと一緒に行動をしていたが、戦局の終盤、部隊がバラバラになっていった時には同胞のそばに来ていたという⁵⁶。

(4) 移動経路 大邱から沖縄まで

大邱で編成された水勤隊は釜山まで列車でいき、釜山港から船で下関港、その後門司港に移動し沖縄に向かった。門司港出港日を海野福寿・権丙卓は7月31日、金元栄は7月29日としている⁵⁷。下関、門司港には水勤隊のみならず沖縄行きを待つ日本軍が集結していた。米軍の攻撃状況をみながら軍団を組み一斉に出発した。途中まで空と海から援護を受けて沖縄に運ばれていった。

船では、蚕棚のように狭く仕切られた船倉にぎっしり押し込まれた。8月の海上は夏の真っ盛り。船室は蒸されて鉄板はやけどする程熱くなる。中は生き地獄となって皆がドアに殺到したが、日本兵が太い竹棒でたたきつけ中に押し返した。余りの苦しさに何度か押し合いの

未やっと甲板になだれ出た時には気絶したものが十数人もいたという⁵⁸。日本兵も同じように船で移動の際、蚕棚状のねぐらに押し込められたが甲板には比較的自由に出入りできている。彼らの手記には蚕棚状の船室が苦しく甲板に出てみたとか、風にあたりながら先行きを憂いたとか海の美しさに感動した、などごく自然な調子で語られている。朝鮮人の処遇とは雲泥の差だ。船では朝鮮人だけが蚕棚状に押し込まれたと思われがちだが、そうではなく、朝鮮人に対しては行動の自由を制限し、暴力的監視管理体制を敷き、奴隷的に取り扱ったということを見てもおかなければならない。

(5) 沖繩到着後の移動経路

護送船団方式で沖繩に向かった水勤隊の4個中隊はそれぞれの目的地に向かうこととなる。

『沖繩方面陸軍作戦』や各中隊の「史実資料」「史実調査参考資料報告」を総合すると、102中隊は、奄美大島古仁屋港で下船（8月7日）、次いで8月10日、103中隊と104中隊が那覇港に到着、下船。最後101中隊が、8月12日、宮古に到着している。

上陸後の各中隊の足取りとその特徴は概略以下のとおりである。

① 101中隊

那覇には上陸せず宮古島に移動した。宮古島到着が12日、第1、第3小隊が宮古島、第2小隊が石垣島に駐屯した。その後の移動はなく同地で終戦を迎える。宮古では28師団輜重兵第28連隊（豊5656）の指揮下に入り平良港で港湾作業についた。45年3月1日平良港で揚陸作業中、米軍の攻撃で船が沈没し、朝鮮人56人が犠牲になった。水勤隊101中隊の徐正福はその時陸側にいて助かったが、その後80人の朝鮮人と共に農作業についたと証言している⁵⁹。宮古島には水勤隊のほかに、朝鮮人が32軍防衛築城隊4、5中隊に69人、第5野戦航空修理廠第2独立整備隊に19人、歩兵第3連隊に13人、比較的まとまった数で動員されている。住民は朝鮮人が井戸掘りや陣地構築作業についているのを見ているが、それがいつの時期なのか、どの部隊の朝鮮人であるかなどの詳細は分かっていない。宮古島、八重山地域には米軍の上陸はなかったが、空爆は継続し、飢餓とマラリヤに苦しめられた。

② 102中隊

8月7日、奄美大島古仁屋港で下船し、第1小隊は暁2740部隊の指揮下に入り港で揚陸作業についた。第2・第3小隊は21日徳之島に渡り独立混成44旅団の指揮下、揚陸作業及び浅間飛行場建設や陣地構築作業についた。同地域で約4か月間駐屯したのち、那覇に向かった。到着したのが同年12月25日。第49兵站地区隊（32軍直轄兵站部隊）の指揮下に入り、名護（第3小隊、許田、明治山山麓）と東村川田村（第1、第2小隊）に駐屯した。主な作業は陣地の坑木伐採と運搬、及び道路づくりである。1945年2月23日那覇に移動、揚陸作業についたが、後方部隊である水勤隊も戦闘可能な部隊として特設連隊に組み込まれ⁶⁰、3月24日、東風平村宜次（49兵站地区隊本部のある南風原地区に隣接）に移動した。4月1日米軍が本島に上陸し地上戦が始まると前線への弾薬運搬をさせられ、砲爆撃で命を落とすものが増えて行った。5月下旬になると32軍司令部の南部撤退に伴って具志頭村新城へ物資後送にあたっ

たが、そこにも米軍が迫り、すぐさま糸満の山城に移動した。この頃になると米軍の砲爆撃がすさまじく次第に部隊は離散し点呼もなくなっていきありさまだった。6月10日、62師団輜重隊の下に入り20、21日山城で「中隊殲滅」（水勤隊102中隊史実資料）した。102中隊は106人の死亡者中87人が糸満地域で死亡、そのうちの71人が6月20日山城で亡くなっている。「船舶軍（沖繩）留守名簿」102中隊表紙には「大部分死亡か？」とメモ書きがあり、氏名欄下部には「死推」の印鑑が一律押されている。犠牲の多かった部隊である。

③ 103中隊

那覇港に到着後、49兵站地区隊の指揮命令下、那覇港の揚陸・運搬作業についた。1944年の10・10空襲で犠牲者が出ている。翌年の1945年2月17日、慶良間諸島に移動、座間味島と阿嘉島・慶留間島に分かれて駐屯した。座間味では海上挺進第1戦隊長（梅澤裕）の配下に、阿嘉・慶留間では第2戦隊長（野田佳彦）の配下に入った。同地で終戦を迎える。当初の主任務は特攻艇を海に浮かべる泛水作業であったが、米軍上陸直前、挺進隊は特攻艇を自ら壊し、出撃には至らなかった。米軍の上陸時には戦闘訓練なしのまま斬り込みを強要され犠牲になっている。阿嘉島では日本軍の恐怖支配が敷かれ、監禁壕に閉じ込められたり、処刑が行われた。また食糧難に苦しめられ餓死者が出た。

④ 104中隊

那覇港に到着後、49兵站地区隊の指揮下に入り、同港で揚陸作業に入ったが、同月27日第2小隊が本部町渡久地に、第1と第3小隊が読谷の渡具知に移動した。読谷では渡具知港の揚陸・運搬作業に、本部では渡久地港で揚陸、運搬、伊豆見八重岳で陣地構築につき、4か月後の12月27日那覇に中隊全体が戻った。翌45年2月10日第1小隊が渡嘉敷島に移動し、海上挺進第3戦隊の指揮下に入った。那覇に残った2個小隊は102中隊と同じく特設連隊に編成され、3月26日南風原山川に移動、首里及び付近の戦闘に参加。32軍司令部の撤退に伴って5月29日糸満の真栄平に移動、真栄平、新垣、山城の戦闘に参加、6月22日全員切り込み隊となった。104中隊は首里山川での死亡が8人、新垣では58人の死亡が確認されている。留守名簿下欄には一律状況不明の④の印鑑が押されている。渡嘉敷島に移動した第1小隊は阿嘉島と同じように飢餓に苦しめられ、日本軍の厳しい監視の下、統制違反を理由として処刑が行われた。

3. 水勤隊の港湾荷役作業

水勤隊は沖繩に到着するやすぐさま港湾作業についた。本島では49兵站地区隊の作命（作戦命令）を受け、那覇港、読谷渡具知港、本部渡久地港で、宮古では28師団輜重兵第28連隊（豊5656）の指揮下で平良港、奄美大島では暁2740（第40部隊）指揮下で古仁屋港、そして徳之島でも港湾作業についた。船で大量に運び込まれる物資の陸揚げ、集積場や倉庫までの運搬、他部隊への受け渡しなどのほか、港の道路拡張、整地作業など港整備の作業にもついた。この時期沖繩の港は大型船舶が接岸できず、沖合に停泊した輸送船から上陸用舟艇に積みかえ

て陸揚げしなければならなかった。「本日波高く上陸用舟艇ニ木材ヲ積ミ込ミ中、足ヲ骨折ス」(「104中隊 9月陣中日誌」読谷村渡具知港)という記録がある。陸上とは違って足場が不安定な海上作業、かさも重量もある物資の積下ろし、陸揚げは危険が付きまとった。

「第62師団の輜重隊戦闘経過の概要⁶¹」にこの頃的那覇港のようすが出てくる。「転進ニ当たり携行セル各部隊ノ荷物ハ極メテ膨大ナル数量ニ上リ 加ウルニ上陸直後那覇埠頭ニ於テ受領セル兵器弾薬築城資材並ビニ糧秣軍需資材等ハ想像ヲ許サザルモノアリ 輸送力ノ全部ヲ拵ゲテモ昼夜兼行ノ努力ヲ払ウト共ニ 一方防御陣地ノ構築ハ一日モ施○ニスルヲ許サズ 部隊将兵ノ苦心筆舌ニ尽クシ得ザルモノアリ」「鉄道ヲ除ク其ノ他ノ輸送機関ハ総テ片道輸送トナリ 狹隘ナル道路及積卸位置ハ混雑甚ダシク 特ニ那覇港岸ノ如キハ自動車1小隊(12両)ヲ積載発行セシムルニ 半日余ヲ空費スル如キ状態ニアリ」「島内輸送能率ハ著シク低下シ 作戦準備ニ支障ヲ生ズルコト極メテ大ナルモノアリ」(旧漢字は新漢字に直した)というほどに想像を絶する大量の軍需物資が入港し、そのため輸送力すべて出し切っても昼夜通しの作業になるしかない状態であった。一方陣地構築に影響があってはならずそのため苦心しているが道路の未整備と相まってその混雑、渋滞はひどく、作業は遅々と進まず作戦にも影響が出ていると嘆いている。那覇港の物資のただならぬ量とその混雑ぶりがよくわかる。ここで作業をしていた水勤隊の仕事量たるや想像を絶するものがある。

読谷村渡具知港にいた104中隊の44年9月陣中日誌に9月の荷役総量が出ている。「米65,611袋、木材543粒、建築道具499梱、弾薬20,350箱、梱包糧秣45,572梱、セメント5,490袋、需品(各種含)22,846梱、大豆160俵、被服6,082梱、兵器(短銃機関銃)3,180梱、4門、揮発油1,829ガソリタンク、釘582噸、移動起重機1台、大発機艇5隻、馬量(ママ)1,333梱、その他鋼材130噸、品目不明3,000梱」。このときの渡具知港の人数は第1,3小隊の425人(2個小隊)である。うち1個小隊が1週間ほど与那原へ派遣され、9月24日からは84人残して那覇港の応援に行ってしまった。欠けた人数でこれだけの量をこなしたというのは驚くしかない。作業は平均11時間前後で、終夜に及んだこともあった。

また、同陣中日誌、9月27日には読谷から那覇港に派遣された部隊についての特記がある。「那覇揚搭作業従事軍夫中、患者ソノ他体力消耗セバ遂次残留員ト交代服務シ作業減数ヲ維持ス」。つまり那覇港では特記されるほど倒れるもの、動けなくなったものが出ている状況であるが、作業量に影響が出ないよう代わりのものを出しているということだ。交替で休んでいるものまで穴埋めのため作業に出されたということになる。

生還者による当時の証言が残されている⁶²。(汗で)夕立にあたってのように服がびしょり、セメントが服にしみて鎧のように固まった。飯盒に3分の1位しか入ってないご飯を3人でたべた。量が増えるよう水を入れてふやかした。一番つらかったのはひもじかったことと過度の労働だ。埠頭に陸揚げされた大砲を山の上まで運んだことがあったが丸太を挟んで押し上げた。缶詰を盗んだのが見つかると相当の体罰が加えられた後、さらに分隊員全員にもたたくよう命ぜられた、彼は気絶し意識が戻らずその後姿が見えなくなった。全体を通して一番

つらかったのはひもじかったことだと証言したものが多い。

那覇港には学徒隊も動員されており、港には朝鮮人がいっぱいいた、日本軍の兵士が竹棒を持って奴隷のように扱っていた、彼らと一緒に作業をした、いつもひもじそうにしていた、などという証言が残されている⁶³。元一中生から直接話を聞く機会があった。「穀物をスコップで袋に入れる作業は中学生、その袋をかついで陸揚げするのは朝鮮人」、「我々は材木の荷役だった、重量のあるドラム缶は朝鮮人軍夫の持ち分で、監督の兵隊にどやされながら懸命に働いていた」。「船から大きなドラム缶をぐるぐると回しながら運んでいた」（航空燃料のドラム缶）。「飯盒のご飯を分けて食べていた、相当おなかを空かせていた」、「僕らがたまにもらったカステラをくれといわれたがあげなかった」、「余計な話をすると兵隊にやられるので話したことはない」。また「彼らが野積みされた荷物の間で下痢をしていた跡があった。原麦が混じって散らばっていた」という証言もあった。ひもじさのあまり生麦を食べ消化されないまま腹を下したのだろう。厳しい監視のもと、どやされ、殴打されながら体力の限界を超える労働を強制され、一方食事は十分に出されなかった様子が浮かび上がってくる。

本部では104中隊第2小隊（211名）が健堅の本部国民学校健堅分校に駐屯し渡久地港で作業についた。1944年9月から11月までこの小隊の陣中日誌⁶⁴が残されており、詳細に様子を知ることができる。第49兵站地区隊渡久地支部の作命を受け、渡久地港で港湾作業をしたが、伊豆見、八重岳の宇土隊の陣地や、高射砲陣地の構築にも駆り出されている。また道路整備や敵空襲に備えて集積弾の移動も手伝った。いわばこの地域の便利屋、労務者集団といった具合だ。港湾作業についてだが、陣中日誌を見ると、9月1日から4日にかけて道志丸と幸丸から陸揚げしている。これを集計すると大発10、被服230㎡、セメント15トン、弾薬706㎡、航空燃料520㎡、重機1台、兵器70㎡（1,134個）、糧秣300㎡（3,595袋）暁部隊隊貨200㎡となる。これを4日単独で見ると190名の「兵力」で道志丸から兵器70㎡（1,134個）、弾薬46㎡（305個）、航空燃料250㎡（830缶）、糧秣300㎡（3,595袋）を陸揚げしている。航空燃料のドラム缶、弾薬一箱とってもその重さは並大抵ではない。軍需物資の中にはこうしたものの他、木材、野菜、木炭、黄色菜、ビール、酒といったものもある。第2小隊の9月から11月までの3ヶ月間の休日はわずか3日、雨のため作業が中止になった日が1日、合わせて4日しかなかった。

住民たちは渡久地港での朝鮮人の姿を見ている。当時14歳だった友利哲夫は「よれよれの軍服を着て路上に横たわる朝鮮人軍夫たち十数人を日本兵が蹴り飛ばしていた。」また「舟艇の上に5～6人並べられロープを束ねたようなものでぶたれていた。端の朝鮮人が倒れて海に落ちたので住民が助けたところ、その住民も日本軍に相当やられていた。」「人間扱いはなかった、ひどかった」と証言する。照屋忠次郎は「軍夫たちはごく子細なことでも難癖をつけられて殴り倒されていた。牛馬にもひどい扱いを受けて男泣きに泣きじゃくっていた光景はいまも忘れることができない」と証言している⁶⁵。真部山で陣地作りをしていた朝鮮人を近くでみていた森松長孝は「いつもひもじい思いをしているようでした。仕事は兵隊の2倍、食事は半分以下でそのうえ殴られっぱなしなので相当の差別を受けていたと思いま

す」と語っている⁶⁶。

宮古島の平良港では1945年3月1日、米軍の攻撃が予想されていたにもかかわらず船からの陸揚げを大急ぎやってしまうよう厳命された。このとき軍夫長だった徐正福は、もし（全部）できなかつたら責任を取ってもらうと脅された。案の定米軍機の直撃を受け2艘の輸送艦と護衛船が沈没し船上で作業をしていた水勤隊や工兵隊が犠牲になった。平良港での朝鮮人犠牲者は56人に上る。

4. 地上戦開始後 ＝水勤隊、配置された地域で異なる状況＝

1944年3月23日、米軍は琉球列島全域に空爆を開始、翌日には艦砲射撃も加え、26日ついに慶良間諸島に上陸した。この日から終戦を迎えるまで、水勤隊がどの地域にいたかによって置かれた状況がそれぞれ異なった。すでに海と空はアメリカ軍に制圧され船の入港はなく水勤隊は新たな任務について行くこととなった。

次のように三通りに大別することができる。

ア、米軍の上陸はなかったが空爆は途切れることなく継続した宮古、石垣島地域。島は孤立し飢餓とマラリアに苦しめられた。

イ、米軍の上陸があったが数日で戦闘が終了し、占領宣言がなされた慶良間諸島。米軍の掃討作戦がなかったために、立て籠った日本軍による島の統制と恐怖支配がはじまった阿嘉島と渡嘉敷島。処刑による犠牲者や飢餓による餓死者がでた。他方同じ慶良間諸島にあっても、米軍が常駐し捕虜収容所が置かれた座間味島では、負傷した戦隊長がいち早く投降したために、住民や兵、朝鮮人軍属の投降がスムーズに進んだ。

ウ、沖縄本島にあった水勤隊。文字通り米軍と交戦する戦場に投げ込まれた。前線への弾薬運搬、斬り込み、敗走に伴う物資の後送、そして南部に追い詰められ全滅した日本軍の道連れとなった。

終わりに

沖縄戦への朝鮮人の動員がどのような規模でなされたかを、配置された部隊、人数などの面からみてきた。また沖縄戦に大規模で動員された朝鮮人部隊、いわゆる特設水上勤務隊については、連行されてきた過程と部隊組織のしくみ、また当初の主任務であった港湾作業につくまでを一区切りとして本稿を終了する。地上戦が始まって以降、水勤隊の4個中隊はそれぞれ別の形をたどることになるが、その先の帰還までを含めて次の機会に発表する予定である。

注記：本稿は、平成28～30年度文部科学省科学研究費助成金基盤研究（C）「沖縄と朝鮮半島を跨ぐトランスナショナルな戦争記憶の歴史的考察」（研究代表者・若林千代）からの助成を受けた。

注

- ¹ 朝鮮人である谷川昇、朝鮮名具仲會氏一家7人全員が1945年8月20日、日本軍によってスパイ容疑で惨殺された事件。すでに日本軍の組織的戦闘が終わっていた1945年6月27日～8月20日のあいだに、久米島で起こった日本軍による住民虐殺事件については大田昌秀『久米島の「沖縄戦」』（沖縄国際平和研究所、2016年）に詳しい。
- ² 1972年8月26日付 沖縄タイムス 新聞記事「もう一つの沖縄戦の実態」
- ³ 大田静男『八重山の戦争』南山舎、1996年/第2次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相調査団「第2次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相調査団報告書」1972年
- ⁴ 本稿（4）①にて説明
- ⁵ 近藤貴明論文「アジア太平洋戦争期における陸軍工員の人事記録—工員名簿、工員手帳、共済組合員原票、留守名簿の制度的概略と戦後の残存状況」（大原社会問題研究所雑誌No.638、2011年、24頁）では「陸軍工員は軍属の範囲に含まれないと理解する」とある。一方「32軍編成人員表」（防衛研究所蔵 請求番号 中央軍事行政編制45）の軍属数書き込み欄は高等文官、判任文官、雇（傭）人・工員の3つに区分され、記入するようになっている。そのため本稿では工員も軍属とした。軍属は一般的には文官（高等、判任）、雇員、傭人に区分されるとされている。
- ⁶ 「特設水上勤務第104中隊（昭和19.9）陣中日誌」原本所蔵機関防衛研究所
- ⁷ 「特設水上勤務第104中隊第2小隊陣中日誌（昭和19.9）原本所蔵機関防衛研究所
- ⁸ 「沖縄作戦ニ於ケル防衛築城隊樋口隊史実資料」1947年、原本所蔵機関防衛研究所。樋口隊は第32軍防衛築城隊（牟田隊）の中にある「隊」である。牟田隊の留守名簿（国立公文書館所蔵、「防衛築城隊（牟田隊）集成自動車・舟艇班・漁労隊球一六一六部隊」）にある樋口隊所属の朝鮮人4人の「役種兵種官等」は現場手、自動車手、機械工となっている。軍属の区分としては傭人であるがその職種が現場手等であるということだ。また牟田隊の「役種兵種官等」には軍夫という記入はない。朝鮮人89人の内訳をみると現場手が最も多く53人、次いで自動車手13人、そのほか機械工、自整備手等の技術職が続く。
- ⁹ 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社、1968年
- ¹⁰ 金元栄『朝鮮人軍夫の沖縄日記』三一書房、1992年
- ¹¹ 竹内康人『戦時朝鮮人強制労働調査資料集増補改訂版』神戸学生センター出版部、2015年
- ¹² 樋口雄一『皇軍兵士にされた朝鮮人』社会評論社、1991年、14頁。樋口は日本軍への朝鮮人動員は日中戦争開始後に始まっており、1941年には大量に動員されたとしている。その根拠として国民徴用令による動員が1941年に4,895人とする「第86帝国議会説明資料」を示している。
- ¹³ 海野福寿・権丙卓『恨 朝鮮人軍夫の沖縄戦』河出書房新社、1987年
- ¹⁴ 塚崎昌之「朝鮮人徴兵制度の実態」『在日朝鮮人史研究』第34号（緑陰書房、2004年）1944年。4月1日から8月20日に徴兵検査が行われ1944年9月から入営が始まった。
- ¹⁵ 樋口雄一『戦時下朝鮮の民衆と徴兵』総和社、2001年、77頁
- ¹⁶ 一中学徒隊資料展示室管理委員会編集『若き血潮ぞ空そめける・一中学徒の戦記』養秀同窓会、

- 2011年、224頁
- ¹⁷ 保坂廣志『沖縄戦捕虜の証言下』紫峰出版、2015年、452頁
- ¹⁸ 同上、435頁
- ¹⁹ 前掲 注13 海野福寿・権丙卓、224頁
- ²⁰ 宮田節子『朝鮮民衆と「皇民化」政策』未來社、1985年/ 姜徳相『朝鮮人学徒出陣』岩波書店、1997年/ 林えいだい『証言集・朝鮮人皇軍兵士・ニューギニア戦の特別志願兵』柘植書房、1995年などに詳しい。
- ²¹ 【南西諸島とは】九州島と台湾島との間、太平洋上に飛び石状に連なる弧状列島。明治の琉球併合のち日本政府が名づけた。大隈諸島、トカラ列島、奄美群島、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島、尖閣諸島、大東諸島からなり太平洋と東シナ海を分ける。32軍の防衛範囲は北緯30度10分以南、東経122度30分以東の南西諸島であり、よって北は屋久島・種子島は含まず西は与那国島まで含まれる。
- ²² 竹内康人『戦時朝鮮人強制労働調査資料集2』神戸学生センター出版部、2012年
- ²³ 竹内康人『調査・朝鮮人強制労働③発電工事・軍事基地編』社会評論社、2014年
- ²⁴ 1971年に日本政府が韓国政府に渡した「旧日本軍在籍朝鮮出身者死亡者名簿」を韓国側が「被徴用死亡者連名簿」として公表したもの
- ²⁵ 前掲 注11 竹内康人
- ²⁶ 韓国国家記録院では海軍の軍人、軍属の名簿を「海軍軍属者名簿」マイクロフィルム26巻分としてまとめ総数を100,788人としている。
- ²⁷ 前掲 注22 竹内康人、66頁
- ²⁸ 竹内康人、2015年「朝鮮人軍人軍属の強制動員数」『大原社会問題研究所雑誌』686号
- ²⁹ この項は注22、注23の著書から筆者がまとめた
- ³⁰ 前掲 注23 竹内康人、342頁
- ³¹ 前掲 注11 竹内康人、122頁
- ³² 沖縄県は1996年度から9年間、厚生省の作成した「旧日本軍在籍朝鮮出身者死亡者連名簿」を基に韓国現地で調査を行い、遺族に刻銘を呼びかけた。厚生省作成の名簿は創氏名で、平和の礎は朝鮮名で刻銘されている。そのため両名簿を照合しても同一人物であると特定するのが困難である。また沖縄県によれば平和の礎刻銘者中約8割は厚生省作成の名簿登載者だということだ。
- ³³ 前掲 注12 樋口雄一、88頁
- ³⁴ 「沖縄作戦二於ケル防衛築城隊 樋口隊史実資料」第32軍残務整理部、1947年
- ³⁵ 本部町教育委員会『本部町の町の移り変わりと人々のくらし』2006年
- ³⁶ 2016.6.30 沖本富貴子による聞き取り調査、証言者、中村英雄氏（本部町健堅在住）
- ³⁷ 保坂廣志『沖縄戦下の日米インテリジェンス』紫峰出版、2013年
- ³⁸ 防衛庁防衛研修所戦史室『沖縄方面海軍作戦』朝雲新聞社、1968年
- ³⁹ 前掲 注11 竹内康人、259頁

- ⁴⁰ 戦没船を記録する会「太平洋戦争時の喪失船舶明細表」
<http://www.ric.hi-ho.ne.jp/senbotusen/siryo-deta/senbotukisenlist.pdf>
- ⁴¹ 戦没した船と海員の資料館<http://www.jsu.or.jp/siryo/>
- ⁴² 那覇市市民文化部文化財課（歴史博物館）編集・発行「那覇の港と沖縄戦」2016年
- ⁴³ 厚生労働省から国立公文書館に移管された特設水上勤務101～104中隊の留守名簿を閲覧した。名簿には日本軍の将校や兵士もすべて収録されており、本来の部隊留守名簿のようだった。「船舶軍（沖縄）留守名簿」で「海上挺進第27基地大隊」とされた者が、国立公文書館で公開された留守名簿では101中隊に所属していた。
- ⁴⁴ 「特設水勤務第101中隊史実調査参考資料報告」関東上陸地支局、1946年/「沖縄作戦ニオケル特設水上勤務第102中隊史実資料」第32軍残務整理部、1947年3月、「第11船舶団史実資料、特設水上勤務102中隊履歴ノ概要」第32軍残務整理部1947年3月/「沖縄作戦ニオケル特設水上勤務第103中隊史実資料」第32軍残務整理部、1947年3月/「103中隊史実調査参考資料報告」関東上陸地支局、1946年3月/「沖縄作戦ニオケル特設水上勤務第104中隊史実資料」1947年3月、第32軍残務整理部、
- ⁴⁵ 注43の厚生労働省から移管された特設水上勤務隊留守名簿には「朝鮮第24部隊、歩兵第80連隊補充隊」と記述されていた。
- ⁴⁶ 前掲 注13 海野福寿・権丙卓、94頁
- ⁴⁷ 강정숙 (Jeong Sook Kang) 史林23号、2005年 수선사학회, 〈사람 (성대사람)〉 23권0호 (2005)、171～206頁
- ⁴⁸ 前掲 注13 海野福寿・権丙卓、104頁
- ⁴⁹ 「アジア太平洋戦争韓国人犠牲者補償請求裁判」訴状より。この裁判は1991年12月韓国太平洋戦争犠牲者遺族会が東京地方裁判所に提訴、1次原告は姜仁昌氏含め35人、2004年11月最高裁判所が原告の控訴を棄却し敗訴が確定した。
- ⁵⁰ 監督朴壽南、映画「アリランのうた」アリランのうた製作委員会、1991年。映画の中で本人が証言している。
- ⁵¹ 前掲 注10 金元榮、139頁
- ⁵² 前掲 注47 강정숙
- ⁵³ 前掲 注50 朴壽南
- ⁵⁴ 前掲 注10 金元榮、17頁
- ⁵⁵ 前掲 注10 金元榮、21頁
- ⁵⁶ 前掲 注10 金元榮、156頁
- ⁵⁷ 前掲 注10 金元榮、27頁 / 注13 海野福寿・権丙卓、134頁
- ⁵⁸ 前掲 注10 金元榮、26頁
- ⁵⁹ 日韓共同「日本軍慰安所」宮古島調査団『戦場の宮古島と「慰安所」』なんよう文庫、2009年、97頁

- ⁶⁰ 球作命甲第112号（1945年3月20日推定）で航空、船舶、兵站部隊などを地上戦闘に使用できるように特設部隊として編成することを命じ、球作命甲第113号（1945年3月21日）でこれら部隊の運用計画が示された。
- ⁶¹ 「第62師団輜重隊戦闘経過の概要」第62師団史実資料（3）防衛研究所所蔵
- ⁶² 前掲 注13 海野福寿・権丙卓、156頁
- ⁶³ 「続最後の一中生」編集委員会『いきてしやまん 続最後の一中生』県立一中さくら会、2005年、47頁、298頁
- ⁶⁴ 前掲 注7 「特設水上勤務第104中隊第2小隊陣中日誌（昭和19.9）」、及び同10月、11月陣中日誌、防衛研究所所蔵
- ⁶⁵ 町民の戦時体験記編集委員会『町民の戦時体験記』本部町教育委員会、1996年、213頁
- ⁶⁶ 『八重岳・ふるさと 芭蕉敷記念誌』芭蕉敷会、2007年、186頁